

水と炎

第三卷

東京小町

主な登場人物・国

□ナジャ家□

■キト・ナジャ ■レアレス公国の国境付近、元はハットカバス自治区だったカトロス出身の少年。炎の神・カーミラの術者。肌は褐色、髪は黒、碧眼。

■シロウ・ナジャ ■キトの父親。元は大工だったが、生活のために鉱山の仕事を始めた為、鉱山特有の肺病にかかってしまう。肌は褐色、髪と目は黒。

□レジストン家□

■カルーア・レジストン ■レアレス公国において最も巨大な企業、レジストン財団の御曹司。生まれつき水の神・ウオーラの術者。肌は白、金髪、碧眼。父親の意向で、十八歳未満だが術法研究所でボランティアをしている。

■カンパリ・レジストン ■カルーアの祖父。レジストン財団の会長。若い頃神学を専門に勉強していたので、神に詳しい。カルーアの能力をいち早く見抜いた。カルーアの数少ない理解者。

■カシス・レジストン ■カルーアの父にしてレジストン財団の社長。丸八年息子と顔を合わせていない。

■マドラー・シングルトン ■カルーア付きの秘書。マーシャルアーツ（格闘技）に長けている。

□術法研究所

■リンダ・ウインダム ■術法研究所所長。緑の神オアーの術者。肌は白、髪はブルネット、碧眼。

■ミリー・マリアノ ■術法研究所に所属する術者。紙の神ピルスーリの術者。リンダの親友でもある。肌は白、髪は紫（染めている）、碧眼。

■ドクター・クリスプ ■ハットカバス王国出身の術法研究所付きの医者。雷の神ラージの術者。肌は白、髪と目は黒。

□その他

■フィクサー ■カルーアのクラスメイトのガキ大将。キトを集団リンチしたところを、カルーアが助けた。

■サクラ・エコルノ ■首都にやってきて、身寄りがなくなってしまったキトの面倒をみる、国から斡旋された養母。ハットカバス人のような名前だが、れっきとしたレアレス国民。

□国・地域

■レアレス公国 ■民主主義制度の、世界に対しても強い影響力を持つ大国。軍隊を持ち、近隣のハットカバス王国とは歴史上何度も戦争をしている。

■ハットカバス王国 ■レアレス公国の南方に位置する国家。代々術者を輩出する血筋のハットカバス一家が支配している。

■ハットカバス自治区 ■ハットカバスが自治を認めている地区。

前巻のあらすじ

レアレス公国の田舎に住む少年、キト・ナジャは父親シロウの病気を治すために、首都であるレストンに列車でやつてくる。キトは炎の神カーミラに守られる「術者」だった。その力を使ってボランテアをする見返りに、シロウの治療をするという取引を少年は国と行ったのだ。シロウは無事入院し、キトは国が斡旋してくれた養母・サクラの家で暮らすことになる。そして首都の子供の義務である学校にも通わなければならなかった。

学校初日、遅刻しそうになったキトは学校の校門で、水の神ウオーラを宿す少年、カルーア・レジストンに出会う。カルーアはキトのことを秘書のマドラー・シングルトンに任せ、「また話が見たいな！」と言い残して校舎に入っていくのだった。

その日の昼食時、カルーアがキトのところに現れる。お互いの女神同士はすぐに打ち解け合うのだが、いまいちキトはカルーアとフランクに会話をすることができないでいた。

そこに目をつけたのか、悪ガキであるフィクサーの一味がキトを人気がないところに連れ込んで集団リンチを行う。そしてそこに現れたのはカルーアだった。「僕の力を知らないわけじゃないだろう？」というカルーアに、態度が一変して謝るフィクサー。しかしそんな彼に、カルーアは呪文を使って水球を作り出しフィクサーを閉じ込め、こらしめた。だがキトはカルーアを殴りつけて「お前と一緒にするな！」と言い放ち立ち去る。ショックを受けたカルーアは祖父に話をし、泣くのがだった。

神と術者について

- ・自然物、人工物などを司る。見た目は全て女性で、姿は様々。「神」「女神」「物神（ものがみ）」とも呼ばれる。
- ・物神は特定の人間について、その人間を守る。守られている人間を「術者」という。
- ・術者は物神の力を「呪文」を唱えることによって使うことができる。呪文は神によって違う。
- ・物神は通常、うつすらとした姿（幻影）となっていて、術者以外の人間にはその姿を見ることはできない。（実体は無制限となり、遠隔で術者と物神で会話が可能になる）
- ・幻影状態の物神は、術者と五十メートル以上離れることはできない。
- ・物神の幻影は天然の宝石を身につけることで消すことができる。しかしその場合、その術者は呪文を使うことができなくなる上、他人の物神も見えなくなってしまう。
- ・術者は物神を実体として呼び出すことができる。そうすると、術者ではない者にも神の姿が見えるようになる。術者は呪文を使えなくなるが、神が直接能力を行使できる。
- ・術者が物神を実体として呼び出すと、身体がうつすらと光り、術者だけにはそれが見える。
- ・物神は術者が死ぬまで術者についている。術者が死ぬと、転生を迎え、別の術者につくようになる。転生後の物神は転生前の記憶を持たない上、見た目などもまるで違う場合もある。
- ・物神と術者（男性のみ）の間に生まれた者を「精霊」という。人間の二倍の寿命を持ち、呪文を詠唱しなくとも神の力を行使することができる。術者同様、他の物神の幻影を見ることができる。術者が死んでも、精霊の能力はなくなるらない。
- ・物神には序列がある。例えば、太陽の神は炎の神の上級神、海の神は水の神の下級神である。

第二章 緑と雷

— 1 —

レアレス公国の首都レストンの中心地に、巨大な敷地を持つ術法研究所。

それはこの国の、司法、立法、軍事、術法の四柱うちひとつを担う重要な機関であり、術者にとつてもそうでない者にとつてもなくてはならない施設だ。

歴史はこの国の軍隊と同じくらい古く、所長は議員の資格が与えられるほど、政治とも密接に関わっている。

術法研究所自体は、「術法庁」という省庁の一機関として存在する。術法庁自体は以下の課に分かれる。

- ・ 術者と物神の登録とその管理（管理課）
- ・ 物神絡みであると思われる超常現象を伴う事件の調査・解決（調査課）
- ・ 有事（災害救助や戦争）における術者の斡旋・派遣、ボランティア斡旋（派遣課）
- ・ 物神の歴史と術者についての資料を有する国立図書館の管理運営（資料課）

これらとは別に、研究を主な目的とするのが術法研究所で、ここには研究員や術者が所属する。ちなみに位置付けとしては術法庁の上位にあり、術法庁で実績をあげたものが試験を受けて研究員になる。

ただし純粋な研究機関なので、実務は術法庁の職員に一部委託している。研究所そのものに所属するのは研究員か術者のみということになる。

そして術者は有事の場合、術法庁からの依頼で仕事を引き受けたり、登録制のボランティアをしたりする。

この術者のボランティア活動は、原則十八歳からしか行うことはできない。

この国は司法・立法・軍事・術法の四柱は権力を持つ特別な機関とされ、互いが互いを監視し合うシステムを採用している。全ての通常業務内容は明らかにされ、明確な理由がない限りどんな予算も使うことは出来ない。文字通り全てが検閲されているわけではないにせよ、ここに所属する人間の行動は常に監視され、制限がかかっているのも事実だ。

人知を超えた能力を発揮できる神もいることから、この術法研究所の存在を一番意識しているのが軍事を司る軍隊だった。軍隊は、自分達の存在をいろいろな意味で脅かす可能性がある術法研究所を恐れ、牽制してきた。

過去のどの代であろうと、軍隊の頂点の將軍と、術法研究所の頂点の所長は友好的に振舞うことはできず、何かといさかいを起こした。

術法研究所では、全ての術者は神の幻影を消すことを義務付けられる。

入り口にセキュリティチェックがあり、まず術者によって術者であると見分けられた者には宝石がついた「首輪」が渡される。

これはその気になればいつでも外すことができるものだが、その術者がどこにいるかはセキュリティを司る術者によって把握されている。

そして術法研究所内の中庭・裏庭に限っては首輪を外すことが認められている。

術法研究所にいる人間は、事務を行う術法庁の職員、研究員、術者に分かれるが、それぞれは見た目で簡単に見分けがつく。

まず研究員には制服がある。簡単なローブだが、研究員はこれを着ないで所内にいることは許されない。

そして術者は首輪をしている。ローブも首輪もないのが、術法庁職員というわけだ。

その首輪をはめて、スーツを着た人物が術法研究所内を歩いていた。

白い肌、黒い瞳、黒い髪。眼鏡をしていて、右手に何かの箱、左手に大きな革の鞆を持っている。三十代くらいの男性だ。

その男性の正面から歩いてきた研究員が、男性に気付いて声をかけた。

「こんにちは、ドクター」

「こんにちは」

ローブの研究員は、ドクターと呼ばれた男の背中に向かって言った。

「ドクター、のんびりしていいんですか？」

ドクターは顔だけ振り返ると答えた。

「何のことですか？ 今日のはたまたま開いた時間があつたから来ただけなんですけど……」

「え？ 所長に聞いてないんですか？ 炎の神の術者が見つかったんですよ」

ドクターは持っていた箱を落としそうになり、慌てて掴みなおした。

「本当ですか、それは」

「ええ。ご存知かと思つてましたよ。何でもこれから、裏庭で能力を披露するとかで。これか

ら行くところなんですよ」

「そうですか、ありがとうございます」

研究員の「どういたしました」も聞かないうちに、ドクターは早足に歩き出していた。

ドクターは「医務室」という札が取り付けられた部屋に勢いよく入つていった。

「ドクター。こんにちは」

「あら！ 今日いらつしやるとは思いませんでしたわ」

「こんにちはドクター」

三人いた看護婦達が口々に挨拶をする。

「あの、すいません、私ちよつとこれから行きたいところがあるので、これの詳しい受け渡しは後でも構いませんか」

ドクターは騒々しく荷物を机の上に置いた。置いたというより放つたという感じだった。

その荒つぽさに看護婦達はやや戸惑つた様子だった。普段そういう態度は取らない人間だからなのだが、当の本人は全く気付いていなかった。

「まあまあ、ドクター。確かに気になつてしょうがないでしょうね、終わつたら戻つてきてく

「ださいましね」

一番年配の看護婦が優しく答えた。

直接術法の話題とは関係ない業務をこなしている医務室の看護婦ですら知っているらしい。ということは、今の今まで知らなかった自分は相当情報が遅いようだ。

故意に知らされなかった？

ドクターはその可能性を頭から追い出した。そんなわけではない。

「では、後程」

扉が閉まると、看護婦達は声を殺して笑った。

ドクターが裏庭に行くと、そこにはもうかなりの人が集まっていた。ざっと五十人くらいだろうか。

裏庭は中庭と違って整備されてはいないものの、地面には一面膝丈程度の雑草が生えている。だが今日はその中央が四角く刈り取られ、その中央に木製の小屋が建てられている。

ギャラリーがいるのは術法研究所の建物の目の前で、小屋との距離は五十メートルくらいだ。

ドクターはギャラリーをざっと見渡し、目当ての人物がいるのを見つけると、そこに向かって歩いていった。

「こんにちは、リンダ。貴方も人が悪いですね」

いきなり耳元で声をかけられたその女性は、びつくりしたように身を引いた。

「ドクター・クリスプ！」

そのリンダは白い肌ブルネットの長い髪、碧眼の美しい顔立ちの女性だった。体つきも華奢で、か弱い見た目だ。首には首輪をしている。足首まであるうかという長い長いスカートのワンピースを着ている。

「ごめんなさい、別に隠していたわけではなかったのですけれど……」

「まあこうして今日もお美しいあなたにも会えたわけですし、間に合ったようですから構わないのですけどね」

「おべんちやら言いに来たの、炎の神の術者を見に来たの、どっちなの」
ドクター・クリスプがいるのと反対側の隣から、別の女性の声がした。

「こんにちは、マリアノ女史」

マリアノという女性は、なんと紫色の髪をしている。リンダ同様染めているのだが、この国でも紫の髪を持つ女性は彼女くらいなものだろう。これまた派手な色の赤い口紅をして、その口が煙草をくわえている。彼女もまた、首輪をしていた。

「私はあるたのお目付け役だからさ。リンダに変なことしないようにね」
「そんな、人を獣か何かみたいにな」

「所長に色目使うんじゃないよ。他の女にも同じことしてるくせに」

「そろそろ始めてもいいでしょうか？ お二人とも」
口論に耐えかねたのか、リンダが声を荒げていった。

「どうぞ」

マリアノが煙を吐きつつ煙草の灰を持っていたマグカップに落としながら答えた。

リンダはギャラリーの最前列の一番左側に向かつて

「呼んできてください」

と声をかけた。一番左にいた研究員が、小走りに建物の中に入っていった。

「とはいえま、五大神はあるたの研究テーマでもあるわけだし、正直感想はどうよ？」

「わくわくしてますよ勿論。だからこうして飛んできたのです」

マリアノはもう次の煙草を口にくわえながら

「女以外のこともわくわくするのねえ」

などと茶化す。

このドクター・クリスプはこの術法研究所のお抱え医師であると同時に術者でもあり、さらに研究員でもある。正式に勤務している病院も他にあるため、金銭的なことではなく純粹に知的好奇心から研究員をやっている彼が、最初からずっと研究テーマにしているのが「五大神」なのだ。

自然の中でも最も強いとされる力、水、炎、風、雷、土が五大神だ。この国では現在水と雷の術者しか報告されていない。外国でなければ潜在的にこの国のどこかに存在する可能性もあったが、国民全員を登録するこの国ではそれはありえないのではないかとされていた。

だがそのうちの炎の神の術者が見つかったのだ。これは研究が大いに進展するということがほぼ約束されたようなものだ。

とはいったものの、ドクター・クリスプはその能力は書物でしか見たことがなかった。過去にこの国には炎の神の術者は数回出現しており、軍隊にその術者がいたこともある。だがその能力を直に見たことがある者は最早生きてはおらず、その力は伝説になりかけていた。

「術者はどんな人なんですか」

「それがビックリよ。カルーアと同じ年の子供なの」

ドクター・クリスプはリンダに聞いたのだが、マリアノが答えた。

「そうなんですか……」

「五年前くらいにこの国になったカトロスという辺境の子なんです。ミリーが見つけたんです、

本当に偶然で」

リンダが言った。ちなみにミリーとはマリアノの名前だ。

「ではまだこの都市に来てそんなに経ってないんですか？」

「ええ。お父さんがいらっしやって、一緒に来たの」

それを聞きドクター・クリスプが「まさか」と言おうとした時にギャラリーが沸いた。

先程の研究員が、術者を連れてきたのだ。

ハットカバス自治区民の血筋らしい。褐色の肌に、黒髪だ。だが瞳は純粋なレアレス人のように蒼い。とても変わった風貌だ。多国籍的というか。

だがカルーア・レジストンと同じ年とは思えないくらい背が低く、痩せ細っている。栄養がよくなかったためなのだろう。

ドクター・クリスプは医者としての観点から、この少年のことが気にかかっていた。なんだか生氣がなく、ぼんやり、ぐったりしているように見える。

少年は研究員と共にリンダの前にやってきた。首輪をしているが、大人用のものなのでやたら大きく感じられる。

リンダが少年に向かって言った。

「こんにちは。これからあなたの能力を見せてもらおうわ。人が多いけど、何も気にしなくていいのよ」

「はい。あの、マリアノさん」

「はは。普通にしゃべんなよ」

「あの、本当におれ、ここに連れてよかった。マリアノさんのおかげだから。ありがとう」
「札を言うのはまだ早いかもよ。そのうち帰りたいって思うかもよ」

マリアノの冗談に、強張っていた少年の顔がやや緩んだ。

リンダは首輪を外した。マリアノが手を差し出し、それを受け取った。そしてドクター・クリスプの首輪にも手をかけてぐいぐい引っ張ったので、ドクター・クリスプは急いでそれを外して渡した。

「あなたも首輪を外して」

少年はこくと頷くと、首輪を外した。だがその状態ではまだ首輪を手を持っているため、神の幻影は現れない。

マリアノがあごで地面を指して言った。

「そこに置きな」

少年がしゃがんで首輪を置いた途端、その背中から神が踊り出た。まるで今まで封じ込められていたことが鬱陶しい、とでもいうように物凄い勢いだった。

ギャラリー中の術者から歓声が上がった。

燃えるような赤い神、カーミラがそこにいた。

ドクター・クリスプは心臓の鼓動が高鳴るのを感じていた。生きている間に、この神をこの目で見る事ができるとは思ってもいなかったのだ。

炎の神は、そこかしこにいる術者と神に驚いたようだった。首輪を外した少年も同様の反応をしていた。見える者には、ここには十数の神が見えているのだから。

自らも女神を背負ったリンダはカーミラに向かって言った。

「始めまして。私はリンダ・ウインダム。この所長をしています。今日はキトの能力を見るためにこの場を設けました。あなたの助力を得ることができて感謝しています」

このリンダという所長は、所長になるには役不足かと思われるくらい見た目が弱そうな女性なのだが、実際なってみると以外に強いところもあり周囲を驚かせた。

彼女の祖父も術者であり、同じようにかつてこの所長をしていた。リンダが所長に就任した事情はその辺りが関係している。

カーミラが言った。

「私もキトも分からないことばかりだけれど、同じ仲間にかくさん会えるのは嬉しいわ。こちらこそよろしく」

少年はキトというらしい。やはりハットカバスの名前だ。

だが彼の碧眼は、確かにレアレス人との混血であるということを示している。

「早速だけれど、キト。呪文を使ってあの小屋を燃やして欲しいの。なくなっても構わないわ、

「そのために作ったものだから」

「…分かりました」

キトの表情がまた元のように強張っていた。

思わずドクター・クリスは

「きみ、大丈夫？」

と聞いた。キトは「はい」と小声で答えただけだった。

キトはリンダの前に進み出て、小屋の方を向いて立った。

ギャラリーは自然と静まり返り、余計な言葉を発する者はいなくなった。

カーミラはキトの頭上で、やはり小屋の方を向いて浮いている。

キトはすうつと息を吸うと呪文を唱えた。

「カーエー！」

唱え終わると同時に右手が小屋を指していた。

頭上のカーミラの髪がうごめいたかと思うと、カーミラがその動く髪をつかみ取り小屋に投げ付けた。ほんの一瞬の素早さだった。

小屋の屋根に、小さな炎が生まれた。

と同時に、みるみるその炎は大きくなっていった。

音を立てて炎が燃え上がり、最早小屋は見えなくなっていた。

「すごい！」

ドクター・クリスプは自分が呟いた言葉にも気付いていなかった。

炎は小屋を完全に包み込み、空高く燃え上がっていた。五十メートルはあろうかという赤い柱が立ち上った。

離れたところに立っているドクター・クリスプにも熱く感じられるくらいだった。

「よかった。ちゃんとできて」

マリアノが呟いた。

リンダがキトに歩み寄り、肩に手を置いて言った。

「もういいわ、炎をおさめて」

だが反応がない。リンダは思わずキトの前に回り、顔を見た。

「どうしたの？ キト？」

キトの目はうつろで、どこを見ているのか分からない。

だがその瞳に、赤い炎が映し出されていた。

その、キトの瞳の炎がゆらりと動いた。

「ああ……うわああああああああああ……！」

あらゆる限りの力でキトが叫んだかと思うと、赤い柱もさらに高く太く燃え上がっていた。

「リンダ！」

ドクター・クリスは燃え上がると同時に叫んでいた。

幸いリンダやキトのところまで届くほど炎は大きくならなかった。だが高く燃え上がった炎の上の方は、細くなっているものぐるぐるとうごめいている。まるで竜巻の頂点のようだ。

マリアノとドクター・クリスはリンダとキトの基に駆け寄った。マリアノが走りながら「あんた達はダメ！」と後ろに向かって叫んでいた。

「キト……！ どうしちゃったのっ！」

カーミラが叫ぶ。

ドクター・クリスはキトの顔を見た。焦点が定まっていない目を見て、小屋に向かって差し出されたままの右手首を握った。物凄いスピードで脈を打っている。全速力で走った直後のような脈拍だ。何も運動はしていないというのに。

「キト！？ 聞こえますか？ キト！？」

耳に向かって叫んでも、何も反応しない。ドクター・クリスはキトの左手を取ると、手の甲を思い切りつねった。

……やはり、反応がない。

「やばいよ。この子暴走してる。どうしよう？」

「子供ですから、無理に収めることは避けたいです。炎が自然に治まるのを待つか……」

「これがおさまるっての？ もう小屋なんてとっくにないっての」
ドクター・クリスは術法研究所の建物の方を向いた。

右手を伸ばし、叫んだ。

「ブージャ・ソーラ！」

バシツという物凄い音がして、空から一筋の雷が、建物に向かって落ちた。

とはいえあまりに早い一瞬の出来事だったのに加え、昼間だったので、雷そのものは誰の目にも見えなかった。

雷は術法研究所の三階の窓枠に命中し、枠が壊れたため雨戸が下に落下した。

そこは図書室だった。常に雨戸を閉めて内部の明かりだけにしてある部屋なのだ。雨戸が落ちた窓から、研究員が一人顔を出した。外の事態を見てぎよっとしていている。

「そこに、水の神の術者のカルーアがいるでしょう！ 窓際に連れてきて！」

研究員はドクター・クリスプの意図を察したらしく、すぐに部屋の中に戻って行った。

「カルーアが来てるのか」

マリアノがほっとしたように言った。

すると炎の勢いが再び増していた。キトが再び叫んだためだった。

炎は最早おとなしく上に立ち上ることはせずに、竜巻のように動き始めていた。動いた範囲の裏庭の草が、一瞬にして燃え尽きている。

「早く！」

ドクター・クリスプは歯軋りをして叫んだ。

窓にカルーアが現れた。目の前の巨大な炎を見ただけで、首輪を外したかと思うとすぐに呪文を唱えた。

「ウオーキュシス！ サー！」

巨大な水球が、炎の竜巻に襲い掛かる。

炎の竜巻は水球の直径よりも長い。水球は炎の動きを止めることはできたが、炎そのものは水に取り込まれてもなかなか消えない。

「サージャ！」

カルーアが叫んだ。

と同時に水球がさらにふくらみ、竜巻の上から地面までをカバーする大きさになった。

炎がまったく消えると同時に、キトがリンダの手の中に倒れ込んだ。

術法研究所内の医務室に、ドクター・クリスプ、リンダ、マリアノ、カルーア、そしてキトとそれぞれの術者の女神達、三人の看護婦達がいた。術法研究所内だが、彼等は首輪をしていない。カーミラが見えなくなってしまうからだ。

キトはベッドに寝かされていて、傍らの椅子にドクター・クリスプが座って聴診器をキトの胸に当てている。その背後の中空に、五大神・雷の神ラージがいる。見事に光る金髪のせい、普通の人間が浮いているように見えなくもない。

「命に別状はないですね。皆さんもご存知の通り、呪文は術者の精神と体力を著しく消耗させます」

聴診器を外すと、看護婦がキトの上着の前をしめていく。

「とはいえ、やっかいなのはこれからです」

ドクター・クリスプはリンダに向かって言った。

「彼がこれほどまでに動揺して暴走したのには何か理由がありそうですが…それを探るのか、それとも放っておくのかによっても対応は分かれますが…放っておきませんよね」

「放ってはおきません。キトは自ら望んでここに来たのです。そして能力をうまく発揮できなかった。私達も手助けする義務があります」

ドクター・クリスプとは反対側のベッド際の椅子に座ったリンダの背後に、物神・緑の神オアーがいる。ウェーブした長い髪と、民族衣装を彷彿とさせる薄い布を繋ぎ合わせた服が美しい。

医務室なので煙草を吸えないマリアノは、少し苛立った様子だ。彼女の物神、腰まで届く白髪を持つ紙の神・ピルスーリは部屋の隅に座り込んで、退屈そうに辺りを眺めている。

「その前にひとつ聞かせていただきたいのですが、彼の能力を見たということはボランティアさせるつもりだったんですか？ 未成年のボランティア登録は原則禁止されているはずですが、明確な理由をお聞かせ願えますか？」

マリアノは部屋の窓際に立って、外を見たまま言った。

「キトのオヤジさんがね、病氣なんだよ。鉱山特有の肺病で。それで入院して治療費を一切出す代わりにボランティア登録するっていう取引をしたんだよ、この子は、国と」

ドクター・クリスは「あなたがそう薦めたのですか？」と言いたげにマリアノを見た。丁度部屋の中を振り返った彼女と、目が合った。

「しよがないでしょ。この子だけ連れてくるわけにいかないしよ。提案として言ったら、この子が承諾したまでさ。学業との両立とかが辛くなるようだったら、出世払いもアリだと思ってたよ」

「なるほど。そういうことだったんですか」

カルーアはそれを聞いて驚いていた。

自分と同年、同じ術者なのに、自分とはまるで違う生き方をしているキトのような者もいるのだ。

キトは病気の父親のために自らの力を使うことを決めた。自分の父親を、自分の意志で助けたい。

だが自分はどうか。父親から命じられ、たまにやりたくないと思いつつも「人の役に立っているのだから」と思うことで気持ち奮い立たせて、なんとかやっている程度だ。

勉強はともかく、誰かと一緒に遊びたくても、生まれた家にふさわしい大人になるためならば仕方がないと割り切ってやっている。

生きるために必要なものには何一つ不自由しない上で、さらなる高みを目指して「訓練」をしているだけに過ぎない。

キトはもうこの年にして、自分の力で生きようとしている。

それなのに：自分のこの有様はなんだ？

自分がやってきた今までのことが、まったくままごとのように思えてくる…

ドクター・クリスは今度は中空に浮いているカーミラに向かって言った。

「あなたは何か知っているのではないですか？」

「悪いけど：私が知っているのは、キトはこの呪文を使うのは生まれて初めてだったことだけよ」

その言葉には、その場にいたキト以外の全員が驚いた。

「初めて！？ 全く使ったことがなかったんですか！？」

「そう」

カーミラは何でもないことのように答える。

「呪文を教えなかったの？」

「教えたわよ。でも使わなかった。それだけのこと」

「あなたはそれでもよかったですか？」

「…キトが能力を使おうとしないからといって、無理強いすることはできないわ。私はキトを守っているのだから、能力を使わせるためにいるんじゃないわ」

「いえ、あなたやキトを責めているわけではないのですよ。ただ、あなたの考えが聞きたいだけですよ」

「そりゃあ能力を使ってくれないことは悲しい。…私を必要としないのかって思ったしね、最初は。でも、そうじゃなかったわよ。今までキトと一緒に暮らしてきた十二年間、シロウ、キトのお父さんね、も一緒に、助け合ってやってきたのよ。私も時には、人の姿になっていろいろ手伝ったりしてね。貧乏で食べるものもろくにない生活だったけど、決して不幸ではなかったわ。そうこうしているうちにね、私も能力にはこだわらなくなってきた。だからどうして使おうとしないのか、なんて聞いたこともないのよ」

父子家庭のキト。母親の不在。

カーミラを必要としないわけではないのに呪文は使おうとしない少年。

カトロスは確か辺境の高山地方で、鉱石産業が盛んだった土地だ。現に父親も鉱山特有の病気になっている。炎の需要はいくらでもあるはずだ。

なのに、能力は使わない。

「キトは、こうなることが分かっていたみたいね」
ぼつりとリンダが呟いた。

「その可能性はありえます。虫の知らせとか、人の直感には無視できない能力があるといいますからね」

キト自身に聞いたところでおそらく能力を使いたがらない理由は分からないだろう。おそらく少年は、ぼんやりとはあるがこうなることは分かっている、なんとなく避けてきたのだ。だとすれば、違う方法で探らなければならない。

「リンダ、お願いがあります」

「何ですか」

「これから私は、このキトの父親に会ってこようと思います。キトは当然目覚めないか、おそらく明日の朝まで寝ているでしょうから、起きるまでここに置いておいてあげてください」

「ドクター、キトのお父さんに会ってどうするんですか？」

「ここへ来て初めてカルーアが口をきいた。それまでは重苦しい表情をして押し黙っているばかりだったのだ。」

「キトのお母さんについて聞こうかと思いましたが。カルーア、何か知ってますか？」

「カルーアは首を横に振った。」

「ドクター・クリスは今度はマリアノに向かって聞いた。」

「キトのお父さんが入院してるのは、国立ナーシヤ病院ですよね？」

「そう。個室に移ったら話の気がねなくできるよ」

マリアノはもう、ドクター・クリスの意図を悟ったようだった。

「あの…ドクター、ぼくも一緒に行ったらダメですか？」

「ダメです。申し訳ありませんが」

ドクター・クリスは即答だった。カルーアは小さな声で「わかりました」と言った。

「では、これから支度して向かいます。リンダ、マリアノ女史、後は頼みます」

「キトが目覚めて何があったのか聞いたら答えてしまっているのですか？」

「…いいですよ。何が起こったのか隠すのはよくない。けれど、家には返さないでください。私が戻るまで待たせておいてもらえますか？」

リンダは白い右手を顔の高さに持ち上げると、

「リーハ」

と呪文を唱えた。すらりと細い手の内側から、一本の蔓が伸び、一本の花の蕾がついた茎に変わった。

蕾をリンダはドクター・クリスプに渡した。

「キトが目覚めたら、その花を咲かせます」

ドクター・クリスプはリンダの顔を正面から見ると言った。

「…貴方は、本当に美しい。その振る舞いすらも」

ドクター・クリスが病院に向かい、医務室にはリンダ、マリノア、カルーア、キト、そしてそれぞれの神が残った。看護婦達は医務室でも事務を行う部屋に行ってしまった。

カルーアは先程までドクター・クリスが座っていた椅子に座り、キトの顔をじつと見つめていた。マリアノは窓際に立ち、外を眺めている。リンダはカルーアとは反対側に椅子を置いて座っている。

「その子とは、初対面じゃないんだろう？ どうして裏庭に見に来なかったの？」
マリアノが沈黙を破った。

「：ぼく、キトに嫌われるようなことをしてしまったんです」
「なに？」

「キトのことをリンチした学校の奴等を、呪文を使って痛めつけたんです」

「それでこの子があんなのことを嫌うの？ なんで？」

「『お前と一緒にするな』って言われました」

リンダは思わず顔を上げた。カルーアと目が合った。

カルーアが何より、同年代の術者を欲していたのをリンダは知っていた。ここに来てしばらくしてから、カルーアがリンダに聞いたことがあったのだ。

「リンダさん、子供の術者は他にはいないの？」

当時リンダがカルーアに言った返答は、彼を失望させた。そしてその待望の術者が、キトだったというのに。

「でもねえ。助けてもらっておいて随分な言い草ね」

「ぼくが脅し文句を言っただけで、せいづらは逃げて行ったんです。ぼくはそこに追い討ちをかけたんです。力をもって脅すだけならばまだしも、本当に食らわせたんです」

「言ってわかんない馬鹿はなぐりやいのよ」

カルーアは何も言うことができず、苦笑いした。

「キトのその言い方って、能力そのものを忌み嫌っているような感じもするわね」

リンダは時折、独り言なのか、誰に向かって言っているのか分からないようなものの言い方をする。自分に言い聞かせているようでもある。

「私もちよつとそう思った。でもま、この子が能力を使いたがらないって事実を知ってるからそういうことにしたいだけなのかもしれない」

「本人不在で論議しても、しようがないわよね」

今ここにいることはいはるが、論議できる状態にない。

「ねえ、そういうえば、キトのお母さんってどんな人？」

マリアノは部屋の中空にいるカーミラに向かって聞いた。

「私、知らないの。キトを守るようになったのは、キトが二歳の時なんだけど、その時既にキトのお母さんは亡くなっていたの」

「そっか。…厳しいね」

「あなた、ここに連れてきたこと後悔してない？」

リンダのその言葉に、マリアノは振り返って言った。

「してないよ。彼には、他人が理解できない能力がある。でも私達ならばそれを持たない人達よりはずっと、彼を理解してやれる。勿論、理解できない部分だってあるさ。でも神のことなら、私達は共有できるものが必ずある。キトが一生ここを必要とするかどうかは分からないし、それはキト自身が決めることだ。でもこういう場があるんだってことは教えてあげたかったんだよ」

リンダが所長になる前からこのマリアノとは知り合いで、友人でもある。

口が悪く、さばさばしすぎていたまに身も蓋もない感じになることもあるが、リンダはマリアノには絶対の信頼を置いていた。

マリアノは紙の神の術者という、能力としてはあまりぱつとせず、たいしたことはできない術者だ。が、ボランティア活動を活発に行い、特に国内の術者の発見に注力してくれている。

「呪文でたいしたことできないならば、私にできることはこれくらいしかないからね」
と本人は謙遜するのだが、國中のあちこちを飛び回って術者を探し出すことは生易しいことではない。何より、あまりやりたがる人がいない仕事だ。

それをわざわざマリアノが買って出してくれたお陰で、この国の登録術者は三十に届こうとしている。

そしてこうやって、ことあるごとに自分の側にいてさりげなく助けてくれるマリアノに、リンダは感謝してもし切れないくらい、恩を感じていた。

「私もそう思うわ。私自身、他の神に出会えたことはとても嬉しいし、あなたにはいろいろ感謝している」

カーミラが上からマリアノに言った。マリアノは薄く笑った。

「それに、あなたもよ、カルーア」

「え？」

カルーアは思わず声を出した。

「キトは正直、環境が変わりすぎて戸惑っているところもあるのよ。だからあなたに対して何を話したらいいのか分からないようなところがあるの。決して嫌っているわけじゃないのよ。

それは分かってくれてあげて。でもあなたが話し掛けてきてくれたことは、キトはとても嬉しかったと思うのよ。だから、我侭なお願いかもしれないけど、これからもキトと仲良くしてあげて欲しいの。私からもキトには言うから」

「ほくだって、キトとは仲良くしたいと思っているんだ。でも…」

「キトの方が避けるんだったら、何をしても難しいよね。時間が必要になるかもしれないよ。

焦ってどうしようと思っても、キトは余計頑なになるだけでしょ。しばらく時間を置いて、少しずつ、何とかしていくしかないでしょ」

「マリアノさん」

「何」

「今日は…優しいんですね」

「今日は、はいらないっつーの今日は、は！」

マリアノ以外の全員が笑った。